

Eureka X

六年制通信 No.22 令和4年10月21日(金)号

大人になる

松下幸之助が洗濯機や掃除機や炊飯器を売って、「女性を家事労働から解放する」と言ったのは今から60年くらい前でしょうか。昔の母親は一日中家事に追われていました。私は自分の目で見ています。洗濯機がなかったら君たちどうしますか。私は子どもの頃に洗濯板を使いましたが、これが今では歴史の教科書に載っているのだそう。まあそう言われればそうか。君たちは見たことないものね。あれ、使ってみたらわかりますが大変な重労働のうえ指が傷だらけになります。母親の指はあかぎれで赤くなっているのが普通でした。箒と雑巾で掃除するのも大変ですし、スイッチを入れておけばご飯が炊けるなんて夢のような話だったでしょうね。昔はシャワーもなかったし。電子レンジも発明され、考えてみればこの50年で、私たちの生活はこれでもかというほど便利に、そして清潔になりました。

それでもなお、もっと手軽にもっと便利にと、私たちの欲求はとどまるところを知らないように思います。もちろん、そういう欲求が文明を発展させてきたわけですが、一面、人間の弱さとも言えますね。しかし、本来手軽にも便利にもなりようのないものにまで欲求を募らせると、これは弱さではすまなくなって、ついには辛抱することを忘れ、地道に努力する人や勤勉に働く人を冷笑する社会になりはしないかと心配です。世の中には時間をかけて修得すべきことがあります。いや、逆ですかね、時間をかけないと修得できないことがあるのです。努力とは本来地道なもので、地道な努力を嫌っては何も身につかないことは誰もが理解しているはず。ここに手軽さや便利さを求めても、それは修得できることの程度が下がるだけです。英語の勉強でも、文法や難しい文章の読解という時間のかかる努力を避けては、身につく程度は高が知れています。手軽に身についた能力は簡単に失います。手軽に得た知識はすぐに忘れます。それは、人間というものが、人間の精神というものが、手軽でも便利でも簡単でもなく、複雑で重層的なものであるからです。手軽さや便利さだけを求めていると、人間は成長しません。幼稚なまま大人になってしまいます。最近そんな歪(いびつ)なのが増えてきたように思いますが、君たちはそんな不気味な人間になってはいけませんね。

どんな人間も自分だけは騙せませんから、努力は自分の心を裏切ることはありません。ただ、何度も言いますが、努力をすれば自分の思う結果が生じるとは限らないわけです。自分はこんなに努力しているのに、こんなに頑張っているのに、どうして世間に認められないのか、どうして自分の努力を評価してくれないのか、そう思うことがあるでしょうが、その理由はいたって明白です。世間に認められるほどの努力ができて

いないからです。私も昔ちらっと同じような気持ちを抱いたことがありますが、いくつか偉人伝を読んで彼らの底知れぬ努力を知って自分の浅はかさがよくわかりました。富士山に登って初めて目にすることのできる光景を、近くの小さな山に登っただけで見えない、どうして見えないと、俺は苦労して山に登ったのになぜ見えないと駄々をこねているようなものだとわかったからです。先人たちの見た光景は、実際に富士山に登らないと見られないということを知ったわけです。

また、幼稚な人間というのは、例えばいつどんな時でも安全でなくてはならないのであって、そうでないのは何か欠けているからだという考え方をします。昨今そのような浅薄な考え方がはびこっているように思います。安心安全も自分で確保していかなくてはならないのであって、それが当たり前です。いかなる状況になっても、何とかしてそれを自分の力で受け止めて生きていける人間になることが大切なのです。誰もが、大人になれば特に、自分の周りの状況は自分の思い通りにはならない、自分の望むような環境、100%自分の満足のいく環境にいられることなどありえないことを知って、必ず、程度の差こそあれ、何かに対して耐えて生きているのです。自分を取り巻く環境には、自分から見て、何らかの不備があるのは当たり前だと了解していくことも、大人になるということであり、教育の大事な一面ではないでしょうか。

今週のおすすめ

・谷沢永一 『谷沢永一書評コラム 紙つぶて (全)』 (文春文庫)

学生の頃この人の本でゲラゲラ笑いながら読んだのは『あぶくだま遊戯』でした。今は絶版でしょうけどね。この中に「アホばか間抜け大学紀要」という、今では絶対につけられそうにないタイトルの小論文があるのです。大学の先生方が自分の勤める大学に研究論文を出すのですが、それらを集めて出版します。それを大学紀要というのですが、まあその内容がひどいというわけですね。実名で取り上げ、内容を具体的に吟味し、反論の不可能なほどコテンパンにやっつけておられます。普通の神経なら立ち直れないでしょうなあ。読む分には笑えますけど。私は大笑いしていました。

谷沢 (たにざわ) さんの書評コラムは読書の案内書として多くの学生が読んできました。相手が誰であれ、正直に誉め、正直に貶していますので、学界では嫌われたようです。ある学者が谷沢さんと初めて会った時、つい「あなたが、あの、蛇蝎 (だかつ)のごとく嫌われている谷沢先生ですか！」と言ったのは、有名な話。

私はこの人の書いた本をずいぶん読みましたが、ナンバー1は『回想 開高健』です。谷沢開高二人の青春時代を心の底から羨ましく思いました。『紙つぶて』は読書案内として知っておいてよいと思い、少し難しいかとも思いましたが、紹介しました。図書館に入れてあります。ちなみに、すぐれた書評としては別に山村修という人が「狐」という筆名で書いた『狐の書評』(これは絶版かも)があります。私はこの人の文章が大好きで、今でもよく手に取ります。ちくま文庫には『水曜日は狐の書評』もあります。この人の本も読んでごらん。非常に参考になりますよ。

BGMは 森高千里 の 雨 でした…。